

来年度以降のターボジェットエンジン飛行実験に向け、放球前の手順を確認するJAXAスタッフ



模擬燃料注入から撤収まで

発射準備の手順確認

「小型ターボジェット」搭載実験機

【大樹】独立行政法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）は、このほど、大樹航空宇宙実験場（町多目的航空公園内）で、来年度以降、大気球に上る小型ターボジェットエンジン搭載実験機について放球前の手順確認を行った。地上でのオペレーション練習で、大気球につながる台車に機体を固定して模擬燃料を注入、一連の実験の準備にどの程度、時間を費やすかなを確かめた。

大樹航空宇宙実験場でJAXA

JAXAは、マッハ5クラスの「極超音速機」に搭載する同エンジンの開発に取り組んでいる。極超音速機は日米間を約2時間で飛行するジェット機で、2025年をめどに完成を目指している。通常のエンジンでは1000度に達する高温に耐えられないため、氷点下250度近

くまで冷えた燃料の液体水素を使い、エンジン温度を下げるといふ。昨年11月には、大樹の同実験場で燃焼実験を行った。今回は来年度以降の上空での実験を見据え、14、17の両日、16人のスタッフが作業に当たった。格納庫内で実験機を固定した台車を、スライ

ドを動かして、安全面を考慮し、本来使用する可燃性の液体水素を模擬した液化窒素の充填作業を、昼後に分けて行った。

（北雅貴）